

冊 1606
11



洛陽名所集卷之十一目錄

法輪寺井
千代古道
戸難瀬瀧
梅宮
東寺
秋山
城南寺
兼空堂
吉祥院

桂屋
芥河
小待楊
梅津
大通寺
少伎橋
六田
久我森
武杜

大井河
嵐山
大決
松尾
竹田
鳥羽
横大路
眞之堂

龜山
子光寺
大覺寺
西芳寺
仁塚
意塚
羽東師社
西院



法輪寺



大井川

法輪寺

○は寺ハ大井川乃もく山あふもく清涼寺
 りも七八町なりもくあふもくもくめハ葛井寺
 とくいしややふもくハ虚空蔵也
 釈道昌ハ秦氏もく讚列香河乃人なり切程
 ちんはくもくもく後ハもくび東大寺もくあふもく
 具足戒とくけいもく弘法もくもくさぐい灌頂
 壇にのびり天長セもくに内閣もくして伝名
 懺悔導解也もく折もく帝昌に帝もくもく
 臥瀧と庵宰の飛いはもくもくおんもくもく
 とつせもくもくもく昌河もくもくもくもくもく

てまうらうて。先帝の山沢の遊嬉もく
ころづらうくにさだけらるる一膳を
めぬ。はらやみゆのくは後を
てりていり。さきそ帝の飛ハおしくは
かりしやうそく物おあむり。奏言
か海らうるねばさうりうり。虚極
虚供をもとさうさう。本日ま
神のくんに。虚空藏菩薩のりり
その船にさうかの執圓して。法輪寺
係りし。貞観元年に之會講師と
也。初美和申。大井河の水溢し

昌をくうのせにほくん事。まか
ゆらに衆人子のくさうして。日な
く。そのひさくや。まか人の基菩薩
見ゆらうり。貞観元年に僧都
やうらう十七年の春二月。さう
ハとや。率し也。昌法美を講。毎
七十。堂乃。送昌。桂里。
○けふ。大井河の下九条乃西也。

伴勢い亦にともみゆらしく。ふあつてうらぐれ
中におひたり置た。まじいんばのまをねじつう
為家^{まけ}に里のまをにけしとてうらぐれ月の
月の極乃秋れうらひ
お國^{くに}を風よく積そく家へらの里の女をく
とがうらとるほはうらうらひ積ひげなま
つむく。一ぬくの物まひけつとなりか
よとやうんりの女れつお井とのまをくむ
余の祖母^{おば}ゆつてうらうらせたり

大井河

士

つは川を丹波路^{たんぱろ}うらし落出^{おちだ}はらやとて一可^い餘^ひ
色ゆらん。

諺^{ことわざ}にはあみうらつてしよまうくまらうあよ
し。たはゆれまらる美しくいらし出せねば
まがどあうらつとに及びた大うらつてに権^{けん}
律師^{りし}桓^{くわん}輸^ゆは大井はらうらつてあめまら
花をさのつれせむら白波^{しらなみ}うらうらうら
けうらうら丹波^{たんぱ}をた交^{まじ}のまをあらうら
は後成^{ごせい}のまをら公任^{こうにん}のまをらはらうら
まをらうらうらうらうらうらうらうら

白雲暮栢洛西秋詩景因多徒探深大堰
噴雪裡小以君の葉帶風流
こ迷作らうくよもふかこも其韻にたうひ
て余とあり

偏洗吟眸大堰秋紅楓素月弄清函
鷺鷥客一夢千年相續流

龜山

○けい大井への別法將古れ向い天龍寺上
乃心なり

曆應三年に尊氏將軍夢窓國師を拜す
龜山殿の旧跡と点して安藝周防の戦國

をうせしれ天龍とて依り終ひき融覚
龜乃乃角の心をもて根を宮造り
にけり後鳥羽院法親王に龜山殿の
玉のどとて後鳥羽院の末又後鳥羽院
以製よりめんの名打ちて見わさせ
よかしくとて氏士

千代古道

○此取の龜山とて國心乃心樹よまらるる
芥添

○け所ち古通りくたもてや鳥羽は芥川

かくとまゝあなまのうらみごとくつらつらと亦や
後醍醐天皇の初めは幸一好ひくく乃らつらと
仁和帝の幸おつらつらとつらつらと
足利家の心もおつらつらとつらつらと
仁一もつらつらとつらつらとつらつらと

嵐山

○けいふ法輪寺はうらつらと天龍寺のむつひなりふ也
續後選よ西行法師のつらつらと昔より嵐山の心も
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

しそつらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
れ蘇寺のつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

千光寺

○千光寺のつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

うらうら懐にのりてうらうら
玉露をしのびて
さへさへもやちをらん子思ひ捨らんや
ほほけ只ちりた力もさへんとなげに
平相國清盛勢俾にたせしうら小精と
しかつんこまうらうら
かぬ帝のうらうら
なれし小精の切情いし
せんぶらうら
り。寮井御馬にのりて
けいふあなけいふ
いしん野色乃秋の夜
いしん

こころうらうら守めく
くねの一村をこころ
なれあつたの松をせ
いし曲なるを
いし門なるを
御也事なるを
うねゆつるを
國はを
なれしそのま
たそいし
瀬へま引く

権少僧都慶有まうよ
梅のまゝさうしうたはくさあ代れさうさうさうん
くさうさうしうたはくさあ代れさうさうさうん

梅津川

○けふハ梅ハさやれあなう
惠慶法師初め梅は川とてさうさうさう
かきうかんよさのさうさうさうさうさう
くさうさうさうさうさうさうさうさう
乃ちさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう



松尾



松尾

○ け社ハ西芳寺より五六町小也

大元五々に秦都理もぐめく社成りくま
けくきししとや。大山所神く早し。此齋山の
神也一神とぞ。祭ハ四月と乃申日也。貞観年
中にてとてひとさくさくし。

寛弘元年十月十四日に一條院よりくま

神書抄曰昂丹塗矢之化神松尾明神是也
貞観三年に清和帝。無難寺の相應に紹
くさくさくし。宮中あり。阿比合れ法成院

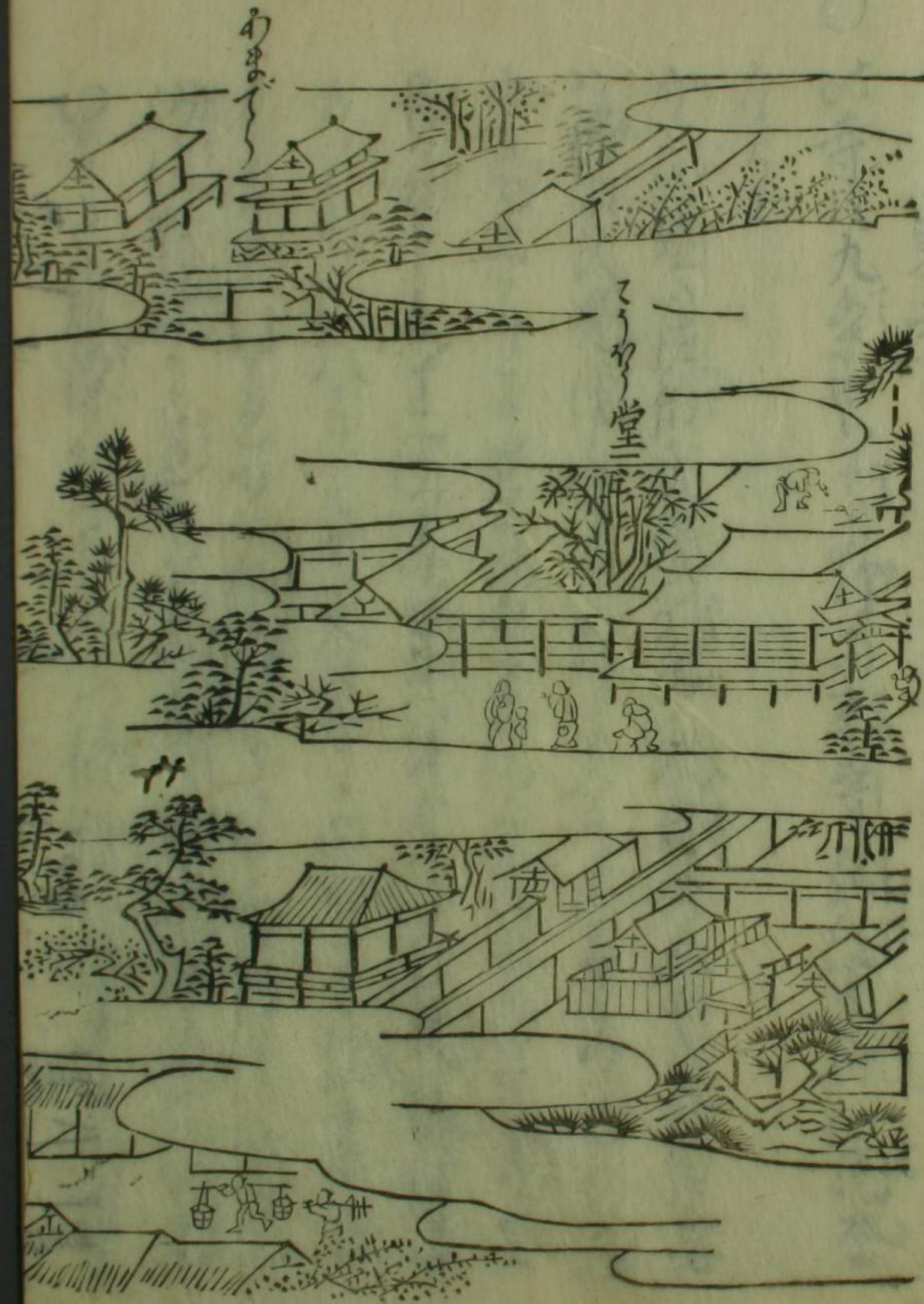
せしに二人を童子成呪傳一はあや一は
こよみ。松尾の御神たるを世々こころに思ふ事その
まう。源僕射に信まきく。世々思ふ事そのま
らまう。にの。次。帝を思ふ。こころに思ふ
ぬ。其時。典侍藤氏の。此童子に化の。まきり
ま。こころに思ふ。り。く。典侍。まきり。く
かり。く。四日。まきり。死。く。まきり。まきり
空也。城。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり
あり。た。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり
まきり。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり
まきり。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり
まきり。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり

せしむとて。思ふ。こころに思ふ。まきり。まきり。まきり
想ひ。く。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり

西芳精舎

○け寺ハ松尾の南。多宝此剛主也。此り。思ふ
は庭石といひ。御僧一人。本。ア。ス。此。入。り。く。り。か
ア。多宝。思ふ。向。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり
のけ。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり
て。錫杖。一。か。た。る。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり
同帳。一。け。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり
ア。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり。まきり

凍



まろびの象列の撰尾心より教海如空う
とある名は二人延暦十四年東大寺に
興起戒律け又空海くわくめ乃仙ある
らるひいふ法法秘びひりり小夢中一人
了告一ハ大徳也と大毗盧遮那神變加
なつく。もぞ真奥の秘要たりたりと
て後了くくくけけくらの水身とさる者
なり。適和のち新那久来道場東塔の
下よりく。のけ秘法とくくくくくく
深くくくくくくくくくくくくくくく
延暦二十三年乙未之月に遣唐使正三位

藤原賀能よきこうい後唐一を十一月長安
城よりく。勅りく宣陽坊の官舎よ。歸く。ゆ
年西の寺未忠法師の如後よ。りり統御を
周益の師法多し。い。ゆめ。は。い。は。青龍寺
の東塔院乃内供奉慧果。講。果不而天廣智
三藏のそをや。
又ら有大悲胎藏大曼荼羅は入死を授よ。心
中よ。い。く。果。く。く。大。ま。り。と。く。果。
秋八月僧法何等親位の灌頂をまげけ。令
剛頂の諸客經國金曼荼羅唯統通具大
いつめ海よ。く。く。く。め。又。刺。實。の。後。是。之
藏よ。ま。ま。六。波。羅。密。經。梵。夾。を。く。け。

元祖元多秋の月は瑞朝一々う。嵯峨帝勅
まじく。宮中よおし。法皇の碩師にあり。あ
おのく。た。ふ。そ。う。と。な。ん。し。ひ。り。り。
海取が成傷の義をい。け。ま。法皇の
ま。く。い。え。帝。海。ま。の。ま。い。に。は。ま。さ。
る。成。ら。せ。ん。し。と。あ。ま。ま。に。海。の。ま。
之。藏。之。慶。地。現。よ。入。念。よ。頂。上。よ。之。仏。の。宝。冠。と
い。ま。さ。か。ま。ま。ま。の。ま。ら。威。容。う。ま。
つ。し。帝。佛。を。ま。ま。ま。作。仏。し。ま。ん。ハ。解
は。法。皇。の。文。の。通。号。唯。德。乃。德。仁。孝。成。成。
適。雄。天。台。の。圖。記。の。ま。ら。法。皇。と。ま。ら。

十有之々。平海帝入壇。法皇一。ま。つ。し。帝。老
の。密。灌。そ。ま。ら。は。ま。海。ま。ま。密。教。法
お。く。勅。め。く。不。業。法。の。へ。毗。盧。遮。那。佛。菩。提
心。海。ま。ま。ま。下。心。海。ま。ま。ま。天。長
元。多。大。よ。四。十。と。ま。ま。月。帝。海。ま。ま。神。皇。死
に。お。し。く。請。兩。臣。の。法。皇。に。せ。し。ひ。し。守。敏
法師。奏。し。つ。ろ。敏。世。ま。法。皇。ま。ま。海。ま。ま
は。ま。ま。召。ま。ま。ま。ま。七。日。ま。ま。期。く。
ひ。の。ま。ま。に。雷。鳴。の。ぬ。瀝。つ。ま。ま。東。西。の。ま
ま。ま。ま。海。ま。召。ま。ま。七。日。ま。ま。ま。
と。ぬ。ま。ま。海。ま。の。ま。ま。摩。捺。ま。ま。

げしと申守敏。緒龍池つらねに遊して一辨へん入る。
海うみより奏して之曰乃公。緒龍池つらねは告し
池いけ中なかにの龍りゆうを善ぜん女にょを野のと。阿彌達池あみだ池の龍りゆうと
乃すなは緒つらねや。この龍りゆうはつらね池つらね池にせむ。つらね池つらね池の龍りゆうと
地ちは之これんんさうさうや。時ときは長なが九く尺せき寸すんたり。金かね名なの
龍りゆう出でる。つらね池つらね池の龍りゆうと。真ま實じつ實じつ慧え真ま實じつ腕わん
真ま然ぜんも七しち人にんのこころ。海うみ事ことは奏そうし。つらね池つらね池
は。和わ真ま綱こうは勅しつして幣へい物ぶつは神かみ龍りゆうは倍ばいしぬ。
こころこころ敬けい目めに。震とら高たかく。大おほは膏こう雨うやそくく。こ
と曰いふ。下したる。か。治ちし。勅しつのく。優ゆう賞しょうあり。つらね池つらね池
心こころは。肉にく列れつに。一いつ寺てらも。こころ。地ちと。龍りゆう池ち也。龍りゆう池ち

そに。つらね池つらね池に。ゆへに。池いけも。潤うるね。寺てら衆しゆも。水みづを
つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。
清きよ泉いづみは。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。
少すく号ごうし。ぬ。この外ほか後ごも。ま。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。
功こう弘こう仁に七しち年ねんよ。紀き列れつは。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。
高たか野の山やまに。乃すなはつらね池つらね池に。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。
乃すなは五月ごご勅しつのく。東とう寺てらと。海うみは。賜たまふ。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。
灌かん頂てい院いんと。つらね池つらね池に。青せい龍りゆうを。れ。法ほふ式しきは。准のりし。毎まい歲さい
二に席せきに。灌かん頂ていの。事ことと。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。つらね池つらね池に。
乃すなはつらね池つらね池に。つらね池つらね池に。健けん陀た國こく。袈け衣い念ねん海かい。乃すなはつらね池つらね池に。つらね池つらね池に。
寺てら續つづと。つらね池つらね池に。天てん長ちやう二に多たに。勅しつして。高たか尾びの。池いけ

衣うつとても回ちん里乃縮むーらんあまきよぬ
ぬ秋のふせ

○壇上 是を鳥羽院御願ちん護摩修せ
張りし

戀塚寺

○い寺ハ鳥羽乃下壇上と云ふよる

世よとて此塚こくくいと花たのうーうーひらハ鳥羽
ま路隈東にきりくろ石碑なりとてこは
野塚とくくその中系はどま束るぬはとぞ
○袈裟のあ石塔ハ戀塚寺よりらにあり
高村い物あてとてたう

むー後部遠藤丸を將監茂遠づる

遠藤茂有盛遠とつとや者内麻の姨母

衣川の娘に袈裟はふとくかをらひりい

やのけろ女房かよ盛遠のつとてはうと

しく思つとあめとせとてとてとや

た清の射渡とてとてのととて嫁つと

ゆりつとてとてとてとてとてとて

はとととととととととととととと

つとととととととととととととと

まてんのととととととととととと

うれ女房いとととととととととと

つらきわつしぬき力成るるのつれ杜きみ下を
かろふめつがふや

葉室至里

○けりハ。流鳥羽のちことと

光俊朝長歌よ。この心かみもしりてうら
くれ竹乃。葉室をれも新撰世への面つけ

久我森

○けり東ハ。葉室をれも新撰世への面つけ

夫本集に光俊朝長歌よ。あやまらば
紅葉をり久我の東に乃わらうやけ
しはくん。又森し。いうらむむくく

人ハ。行久家乃森も。あやまらば

めつら

箕之里

○けり里も。葉室をれも新撰世への面つけ

叶家朝長乃。うらよ。鳥とく。この
叶を。く。あ。又師
に。月。雨。よ。ぬ。れ。し。く。の
門。田。乃。の。高。い。と。さ。ら。う

西寺

○けりハ。東寺乃西。唐橋の下たな

守敏。と。う。し。し。也。あ。つ。ら。家。あ。

